

英語における音象徴(sound symbolism)についての考察

—母音と子音が奏でる見事な小空間—

酒井 典久

音象徴とは

音象徴とは、ある特定の音が聞き手にある特定の意味を規則的、直接的に連想させる現象のことです。例えば、stop「止まる」とstoop「前かがみになる」の2語の音には、それぞれの語が意味する動作の特徴がうまく反映されているのではないでしょう

か。この2つの行為に要する時間を比べてみますと、stoopのほうがstopよりやや時間を要します。そのことが、長母音(やや時間のかかる動作を示唆)と短母音(瞬間的な動作を示唆)とを使い分けることによって、うまく対照されています。似た例に「じゃがいもをchipする(薄く切る)」と「コオロギがchirpする(チーッチーッと鳴く)」もあります。

このような例を見て、特に英語の本来語(ゲルマン語系の語)においては、ある音が「すばやく、力強く、広がって」というようなイメージを、また別の音が「遅く、弱々しく、重々しく」というようなイメージを規則的に連想させる、といった現象があるのではないかと考え、調べてみました。

その結果、英語の擬音語や擬声語においては、時には例外があったり主観的になったりするものの、上記のような規則性がある程度存在することがわかりました。試しに筆者による次の架空の4語がどのようなイメージを連想させるか、下の[]内の選択肢から選んでみてください。

spashipish () malumalo ()
granurue () kittekit ()

- | | |
|----------|--------|
| ① 這う感じ | ② 丸い感じ |
| ③ はじける感じ | ④ 切る感じ |

おそらくほとんどの方が、spashipishは③はじける感じ、malumaloは②丸い感じ、granurueは①這う感じ、kittekitは④切る感じを連想されたのではないのでしょうか。

実のところ、上記の4語に含まれる音のいくつかには、次のような象徴的な特徴があるのです。まず、spashipishの中のspは「勢いのある拡散、散乱」を、語末のshは「空を切るような突然の動きで始まり、余韻を引いて収束する動作」を連想させます。次に、malumaloの中のmもoも「丸さ」を、lは「明るさ、広がり」を連想させます。granurueのgrは「不快さ、重々しさ」を、rは「動き」を、nはsnake「ヘビ」に見られるように「這うこと」を、uは時として「不明瞭」、あるいは「奥に潜む」というような印象を与えます。最後のkittekitの中の、cutを思い浮かばせるkの音は、「急激で瞬間的な動き」を、「短母音[i]+語末の[t]」は「すばやい始動に伴う急な停止」を連想させます。

先ほどの4語は、上記の特定の音に内在する音象徴を読者の情感の中に呼び起こし、ある特定の意味を連想させた、と言えるのではないのでしょうか。

本稿では、英語の音がどのような意味を連想させるのかについて述べていきたいと思ひます。

子音における音象徴

まず、shr-, sq-, str-, sw-という4種類の音はどのようなイメージを連想させるのか、再び下の[]内の選択肢から選んでみてください。

shr- の音象徴は()

shrimp	「小エビ」
shrink	「縮む」
shrug	「(肩を)すくめる」
shrill	「(音・声が)かん高い」

sq- の音象徴は()

squash	「～をぐしゃっとつぶす」
squeak	「(ネズミが)チューチュー鳴く」

squeeze	「～を絞る」
squirt	「～を勢いよく出す」

str- の音象徴は()	
stress	「～を強調する」
stretch	「～を伸ばす」
strike	「～にぶつかる」
struggle	「奮闘する」

sw- の音象徴は()	
sway	「(音楽に合わせ体を)揺らす」
sweep	「(ほうきなどで床などを)掃く」
swim	「泳ぐ」
swing	「～を振り動かす」

- ① 力強さ ② 力強い収縮 ③ 激しい圧縮
④ 主に水平的な、音を伴わない動き

おそらくほとんどの方が、shr- は②力強い収縮、sq- は③激しい圧縮、str- は①力強さ、sw- は④主に水平的な、音を伴わない動きとお答えになったのではないのでしょうか。

shr- は「しゅっと縮む感じ」が、sq- や str- には「ぐっと力が入る感じ」が、sw- には「空を切る感じ」がうまく表現されているのではないのでしょうか。

特に、w は「動き」を連想させます。wrestle 「レスリングをする(相手をひねり倒そうとする)」、wring 「～を絞る」、wrist 「手首」、write 「～を書く」などに共通する概念は「曲げること・ひねること」になります。whisper 「ささやく」や whistle 「口笛を吹く」の場合なら、空気が実際に「ふーっ」と移動する様子が思い浮かぶのではないのでしょうか。

音象徴をもつ語末の -er ・ -le

続いて、ご紹介したいのは、語末に用いられる -er と -le です。例えば、

- { chat 「雑談をする」
- { chatter 「ぺちゃくちゃしゃべる」

- { spark 「火花を出す」
- { sparkle 「きらきら光る」

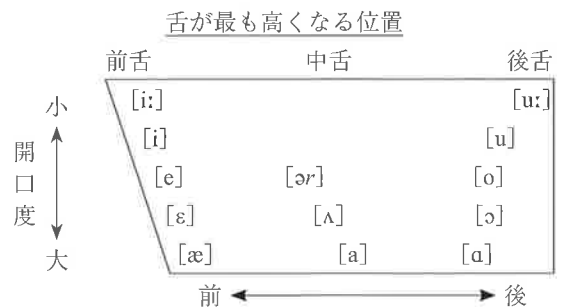
このように、語末に -er や -le が用いられると「反復」というニュアンスが示唆される場合があります。glitter なら「きらきら(反復して)光る」、twitter なら「(スズメなどが)ち、ち、ちと(反復して)鳴く」という意味になります。chuckle なら「くすくす(反復して)笑う」、toddle なら「よちよち(反復して)歩く」という意味になります。

母音における音象徴

さて、ここまでは子音を中心に述べてきたので、以降は母音の音象徴について述べたいと思います。次の2語の組合せは、力の程度という観点からすると、強→弱、弱→強のどちらの順に並んでいる印象を受けるでしょうか。

- drip → drop
- snip → snap

多くの方が弱→強の順という印象を受けたのではないのでしょうか。ここで、下の図をご覧ください。これは、それぞれの母音を発音するとき、舌が最も高くなる、おおよその位置を示したものです。



これまでの研究で、口の開け方が小さいほど(図の上の音ほど)「小さくて弱々しい印象」を、開け方が大きいほど(図の下の音ほど)「大きくて力強い印象」を与える傾向がある、とされています。

先ほどの drip からは「小さなしずくが落ちる」ことを、drop からは「雨粒などからかなり大きい物体まで落ちる」ことを音から連想できるのではないのでしょうか。また、snip と snap の動詞用法の主な例は、snip dead leaves 「枯れた葉をちょきんと切る」、snap a twig in two 「小枝をポキンと2つに折る」などです。snap には、snap a piece of

meat from the table「肉片を食卓から引ったくる」という例さえありました。音の印象どおり、snipよりsnapのほうがより強い力を表しています(なお、本稿の例は『ジーニアス英和辞典』第4版と『新英和大辞典』第5版を参考にしました)。

このように、「開口度が大きければ大きいほど、程度が強い印象」を与えるという傾向は、jingle「(鈴などを)チリンチリン鳴らす([i])」とjangle「(鐘などを)ジャンジャン鳴らす([æ])」、pin「ピン([i])」とpen「ボールペン([e])」、stick「(切り取った)小枝、杖([i])」とstem「茎、(木の)幹([e])」とstock「切り株([a])」のような場合にも当てはまります。また、sip his wine「ワインをちびちび飲む([i])」とswallow food「食べ物を(かまずに)飲み込む([a])」のような例もあります。

物体・程度が小さいほど、口の開け方も小さくなり、それが[i]などの音と意味の両方に反映されています。逆に物体・程度が大きいほど、口の開け方も大きくなり、それが[e]や[a]などの音と意味に反映されています。つまり、外界に対する反応が音と意味に反映されていて、情感に強く迫ってきます。これが英語の魅力の1つなのだと思います。

前舌母音における明暗の示唆

続いて、「明暗」が英語の母音の使い分けにどのように反映されるのかについて述べたいと思います。まず、前ページの図の前舌母音の上下の中で比較してみましょう。「光る、輝く」を連想させる次の2組の語群は、左から右に進むにつれて、光の印象がどのように変わるでしょうか。

- | | | |
|-----------------|-------------|-----------|
| (1) [i:] gleam | [i] glitter | [e] glare |
| (2) [i] flicker | [e] flare | [æ] flash |

実のところ、程度の場合と同様、「開口度が大きければ大きいほど、つまり図で下のほうの音になるほど、明るい印象」を与える傾向があります。上記の語群においても、ほとんどの方が右に進むほど、光り方が強くなる印象を受けたと思います。

glitterとglimmerとではどちらが明るい

glitter「きらきら輝く」に似たglimmerという単語にも[i]が含まれていますが、どちらの語がより弱い輝き方を連想させるのでしょうか。

音象徴的な観点からすると、-itterより-immerのほうが弱い印象を与えます。なぜなら、mはtより「まろやかで穏やかな印象」を与える音だからです。したがって、語中や語末のimは、「程度が弱い」ことを連想させる音になります。例としては、glimmer「かすかに光る」の他に、dim「ほの暗い、見えにくい」、glimpse「～をちらりと見る」、simmer「とろ火でことごと煮る」、slim「ほっそりとした」などがあります。

前舌母音[i:]・後舌母音[u:]と明暗の関係

前舌母音と後舌母音の違いが音象徴に微妙に反映されることがあります。舌の高さがほぼ同じ[i:]と[u:]の場合で比較してみましょう。

- | | | |
|------|--|----------------------|
| [i:] | the gleam of a car's headlights in the fog | 「霧の中の自動車のかすかなヘッドライト」 |
| [u:] | the damp gloom of a cave | 「ほら穴のじめじめした暗がり」 |

[i:]と[u:]は共に光りがかすかであることを連想させますが、前舌母音の[i:]のほうが後舌母音の[u:]より聞き手に若干明るい印象を与えるようです。

この違いは、洞窟を思い浮かべると理解しやすいと思います。洞窟の入り口は明るくとも、奥に行くほど暗くなります。同様に、開口部で発せられる[i:]は明るい印象を与え、口の奥で発せられる[u:]は[i:]よりも暗い印象を与える傾向があるのです。

このように[u:]という音は、[i:]より口の奥から聞こえてくるため、[i:]より暗い印象を与え、gloomは「薄暗闇」→「陰気さ」→「憂鬱」までも意味するようになったのではないかと筆者は考えています。このことは、明るい印象を与えるgreen「緑の([i:])」と「憂鬱な」も意味するblue「青い([u:])」にも当てはまるような気がします。

[æ]と[ʌ]

最後に短母音の[æ]と[ʌ]にまつわる音象徴を比較します。まず、[æ]に関し、この音は力強さと、

時には不快さを連想させる音です。このことは、この音の調音のしかたと関係があるかもしれません。例えば、テレビの映像などで **rattle snake** 「ガラガラヘビ」を見たとき、ぎょっとして防衛本能を働かせるとき、無意識のうちに眉間にしわを寄せる方もいらっしゃると思います。そして、眉間にしわを寄せた瞬間、鼻が眉間のしわに引きずられるように引き上げられるのではないのでしょうか。この鼻が引き上げられた状態で発音しやすいのが [æ] の音です。このため、[æ] の音は「不快な気持ちや警戒心を引き起こすような動作」と結びつきやすいのではないかと、筆者は推測しています。いくつか例を挙げてみます。いずれも身に降りかかってほしくない動作ばかりではないのでしょうか。

bang 「バーンと銃を撃つ」
slap 「(人の顔などを)ピシャリとたたく」
slash 「(ナイフなどで)切りつける」
stab 「(刃物などで)刺す」

一方、[ʌ] という音は [æ] よりも容易に発音できる音だと思います。すぐに発音できるこの音は、「あつという間に済む」、あるいは「反射的にしてしまう」動作によく用いられるのではないのでしょうか。次の例をご覧ください。

bump 「～をぶつける」
dump 「ごみなどを捨てる」
pump 「水などを汲み出す」
hug 「～を抱きしめる」

例えば **bump** からは「バン」と体などを物にぶつける様子が伝わってきますし、**pump** からは汲み上げられた水が「パツ」と勢いよく飛び出してくる様子が連想されるのではないのでしょうか。

また、**bump** には「(ぶつかってできた)こぶ」、**ump** 「(車の速度を落とさせる)隆起」、**ump** 「上昇気流」などの意味があります。**-ump** は、「視線の上下、盛り上がった物」というようなイメージも連想させる、

とされています(**-ump** には **u_p** 「上へ」が含まれています)。

hump 「(ラクダの)こぶ」
jump 「跳躍」
lump 「(角砂糖のような小さな)塊」

同様に、**-unk** についても考えてみました。おそらく、この音は日本語の「カツツ」や「クツツ」に相当し、「ちょっとした衝撃」を連想させたり、容易に発音することのできる [ʌ] の音のため、「単なる塊、つまらない人・物」というようなイメージを帯びやすいのかもしれません。

chunk 「大きな塊、ひとまとまりの表現」
dunk shot 「ダンクシュート」
punk 「くだらない人間、ちんぴら」
junk 「くず、がらくた」

以上、英語における音象徴について述べさせていただきました。皆さんが本稿を読み、音象徴について少しでも関心をもたれたなら幸いです。

参考文献・辞典

- 梅田修(1985). 『英語の語源物語』 東京：大修館書店。
 今里智晃・土屋典生(1984). 『英語の辞書と語源』 東京：大修館書店。
 宮脇正孝(2005). 「John Wallis (1616-1703)の語形成論・語源論の研究(2)：語源探求と音象徴の問題」『専修人文論文集』 第77号 pp.199-229.
 小稲義男(編者)(1980). 『新英和大辞典』 第5版 東京：研究社。
 小西友七・南出康世(編者)(2006). 『ジーニアス英和辞典』 第4版 東京：大修館書店。
 國廣哲彌・堀内克明(編者)(2006). 『プログレッシブ英語逆引き辞典 コンパクト版』 東京：小学館。

(新潟県立三条高等学校教諭)